

バリにおける伝統的な赤米栽培とデンジソウ

中 川 智 裕 *

赤米に引き寄せられて

タガメ (*Kirkaldyia deyerolli*) やデンジソウ (*Marsilea quadrifolia*) など、数十年前には水田で普通に見られた種が、全国的に激減している。筆者は、2022年から、熊本県南部を流れる球磨川流域を中心に、休耕田を活用したビオトープづくりや稲作を通じて、湿地生物の保全に取り組むこととなった。しかし、日々の生活に寄り添いながら暮らしていた里山の生き物たちにとって、これらはあくまで対症療法に過ぎない。豊かな生態系であったはずの日本の水田から、どのようにして生き物が消えていったのか。農業における持続可能性とはどのようなものか。これらを、人間の生活の側から見ていくことで、水田生物の保全に役立つかもしれない。

さて、日本では、祝いごとの際に赤飯を炊く風習があるが、この風習の原型は赤米を食べていたことに由来するという説がある〔門脇 2007〕。また、栽培イネのほとんどが白米であるのに対して、これまで報告されている野生イネのすべてが赤米である〔井澤 2017〕ことも興味深い。このようにイネの源流ともいえる米はアジア各地で現在も栽培されてお



写真1 ジャティルウィの赤米
伝統的農法で栽培され、「ジャティルウィ米」として流通。白米と比べて高値で取引される。

り、バリ島ではジャティルウィ (Jatiluwhi) 村がその産地である。ジャティルウィでは、赤米の栽培に有機肥料を使用するなどの伝統的な農法が継続されており、高収量品種 IR67 の2～3倍の価格で取引されている〔永野 2012〕(写真1)。そのためこの村の水田は、農薬の使用量が少ないために、他の地域と比較して高い生物多様性を維持しているのではないかと考え、2023年1月に4日間のフィールドワークを行なった。

* 熊本県立大学地域共創拠点運営機構 緑の流域治水研究室

牛が紡ぐ循環の糸

空港から2時間半程度だろうか、国営バスとバイクタクシーを乗り継いでジャティルウィに着いたのは日が暮れた頃であった。村のメインストリートから右は商店やヴィラが立ち並んでいる一方で、左は、深い谷となっており、さらにその向こう側には、尾根と谷が連続している。その斜面は決して緩やかなものではないが、さまざまな形やサイズの棚田が覆い尽くしていた。棚田には、バナナやヤシのほか、木造の小屋がポツンポツンと目立つ。この時期は赤米の収穫後のために何も植わっていない水田が多い。この日は食事を済ませて休み、次の日から村を歩いてみることにした。翌朝宿で村のガイドを紹介してもらおうと、とある農家兼ガイドをしているライという地元の男性がやってきて、村中を回ってくれた。筆者が生き物好きであることを知ると、目を輝かせて、この村で伝わる植物の利用方法や迷信などをその植物を手に取りながら話してくれた。

また明くる日、ライが牛の世話をしにいく、と言うので付いて行くことにした。村のメインストリート脇にバイクを停め、歩いて棚田の畦を降りていく。彼の水田はココヤシの生える川沿いにあり、その畦の上に牛舎と作業小屋がある。中には毛並みの美しい雌牛1頭が尻尾をパタパタ振りながらこちらを見ている。今年6歳になるライの娘と一緒に牛を撫でていると、いつの間に刈ったのか、彼は畦に生えていた草を持ってきて餌箱に入れた。牛はそれをむしゃむしゃと食べる。たまに餌箱の底の方の草を咥えて、「君もたべ

なよ」と言わんばかりに差し出してくる。そう思えるほど、この牛と人間とが良い関係性をもっているように感じた。

牛の世話をひととおり終わると、ライは家から持ってきたロープの束を筆者に手渡す。その反対の端を自分の腰に結びつけ、20mはあろうココヤシの木に登り、ココヤシの古い葉と実（ココナッツ）を次々と落とす。そして若い実がついている枝にロープを結びつけ、筆者に合図をする。ロープを握る筆者の手に、ずっしりとした感覚が伝わってくる。その手をやや緩めるとするするとココナッツの房が降りてきた。きれいな葉の束と、実を5つ収穫し、木から降りてきたライは、そのうちの1つをナタで割る。3人でココナッツウォーターを飲み干し、さらに硬い実を割って胚乳部分を食べる。食べ終わると、彼は驚くことに、その殻を鎌で裂き、牛に与えはじめた（写真2）。牛はゆったりとした動きでやはりバリバリむしゃむしゃと食べている。その様子を見届けてから、親子と筆者は村の



写真2 ヤシの実の殻を食べるバリ牛

この村では田畑の耕うんを牛が担うほか、畦の雑草を食べ、排泄された糞は堆肥にされて利用される。



写真3 農作業を終えて帰る農家の男性と娘
収穫したヤシの実と葉を持ち帰り村の売店に卸した。

中心部へと戻った(写真3)。

この村で牛は単なる農作業の労働力ではないことがわかった。農家は草を刈り、牛がそれを食べ、その糞尿から堆肥を作り、肥料として水田に撒く。筆者が見た限り、牛の世話はかなり労力を必要とするものであったが、それを差し引いても有り余るメリットがあるのだろう。実際に、こうして生きものと接し、ゆっくりとした時間軸でエネルギーの循環を利用しながら行なわれる農業が行なわれている。そしてこの農法こそが「伝統的農法」なのだ。牛と人間のゆるやかな関係性が垣間見えた、生産者にとって何気ない日常の風景は、しかし、それを知らなかった筆者にとって、心が安らぐものであった。ここで、真木悠介の『気流の鳴る音』の一節を思い出す。

しかし人間の自然にたいする感触が、他の人間への対応の中に反映し、このような人と人との関係が逆に自然を取り扱う仕方

あらわれ、それが植物の育ち方とか動物の相互の関係のうちに反映し、それがふたたび人と人との関係を形成している、そのような連動関係が幾重にも存在すること。「人間がなごやかだからニワトリもなごやかだ」という言い方は、げんみつな因果連関の表現ではなく、自然と人間のこのような連動の総体性の寓話的な表現として納得することができる。殺風景な社会はかならず自己の周囲に殺風景な自然を生み出す。草や木や動物たちとの交歓を享受する能力は、同時に人間の関係性への味覚をしなやかに発達させる。[真木 2003: 20-21]

真木のいう「連動の総体性」とは、まさに環境同士、生物同士、およびそれら相互の関係を意味する「生態系」に置き換えられる。1960年代から始まった緑の革命の波にのまれて、それまで続けてきたジャティルウィの赤米をこれからも作っていこうとジャティルウィが決めたのは、単に宗教上の理由や、農薬使用の有無ではなく、ウシとイネとヒトの関わり合いが作り出す生態系と、この村のヒトがもつ「関係性への味覚」によるものだと考える。

では、水田周辺の生物はどうか。デンジソウ属の一種(*Marsilea* sp.; 写真4)が水田の脇に多く生育していたし、宝石のような美しさを誇る地域固有種ジャワショウビン(*Halcyon cyanoventris*)を見ることもできた。だが、ジャティルウィ滞在中、泊まっていた宿の周辺や、ライの水田、およびその周辺の川で動植物を手当たり次第に探してみたもの



写真4 デンジソウ属の一種 (*Marsilea* sp.)
クローバーのような見た目をしているが湿地性のシダ植物。日本ではデンジソウやナンゴクデンジソウが生育するが、いずれも絶滅危惧種。

の、意外なことにそれほど多くの種は見つけられなかった。もしやと思い、ライにこのことについて尋ねる。彼は言う。「子どもの頃、友達と川や田んぼに入っては、ウナギや小魚、貝類を捕まえて、おやつにしていたよ。最近、ほとんど見なくなった」と。自然に囲まれた里山で何が起きているのだろう。

地域社会の変化はその大きな一因であると考えられる。ジャティルウィ村の棚田は、2012年7月に他の地区にあるヒンドウ寺院や水源の湖、棚田と併せて、文化的景観としてユネスコ世界遺産に登録された。それから観光客が増え、村の農業は大きく変わった。永野〔2016〕は、その最たるものが、棚田景観を観光客に見せるために二期作が義務付けられたこと、と指摘する。伝統的な稲

作は、すでに転換点を迎えていたのだ。二期作の義務化により、効率化が図られ、伝統的な牛との協働による農作業が、機械農業に取って代われる可能性もある。一方この景観を維持しているのは、ヒトやウシであるばかりでなく、火山が湛える水であり、土であり、そこに暮らす「ただの」草や虫、魚である。それらが系として連動し続けられる農業こそが、持続的な農業である。したがって、里山の生態を保全するためには、自然環境の変化の実態を、地域社会の変化と関連付けて理解することが重要だ。地域間での単純な比較は難しいが、日本ではすでに通り過ぎたであろう里山生態系の変化点をジャティルウィで目の当たりにすることができた。

引用文献

- 井澤 毅. 2017. 「遺伝子の変化から見たイネの起源」『日本醸造協会誌』112(1): 15-21.
- 門脇光一. 2007. 「赤米が白米になった原因を解明」『農業および園芸』82(5): 539-542.
- 永野由紀子. 2012. 「インドネシア・バリ島の水利組織（スバック）における人間と自然の共生システム—タバナン県ジャティルイ村の事例」『専修人間科学論集 社会学篇』2(2): 81-98.
- . 2016. 「世界遺産登録後のバリ島ジャティルイ村の変化—慣習村間の対立と『多元的集団構成』」『専修人間科学論集 社会学篇』6(2): 27-41.
- 真木悠介. 2003. 『気流の鳴る音—交響するコミュニティ』筑摩書房.

マダガスカル熱帯乾燥林を形作るさまざまな動物たち

大河 龍之介*

はじめに

夜明け直後の薄暗さの中、他の研究者たちを起こさないように気を配りながら、ヘッドライトを灯してこっそりとテントから這い出す。調査道具やカメラが詰め込まれたバッグを背負い、キャンプサイトから森へと続く道をゆっくりと登っていく。ふと視線を感じ周囲を見渡すと、木の上からジーンとこちらを見つめるコクレルシファカ (*Propithecus coquereli*) と目が合う。ガサガサッと隣で音がしたと思い目を向けると、こちらから見えないように木の反対側にキュビエブキオトカゲ (*Oplurus cuvieri*) が隠れる。「ギャッ、ギャッ、ギャッ」とハシナガオオハシモズ (*Falcula palliata*) が声を上げると、それに呼応して周囲の仲間も鳴き始める。私が140日を過ごしたマダガスカルのアンカラファンツィカ国立公園の朝は、森に暮らす動物たちの息遣いを感じながら始まる。

熱帯乾燥林アンカラファンツィカ

京都大学の研究チームが調査地としているアンカラファンツィカ国立公園は、マダガスカルの北西部、アンバトゥブニー地方に位置する136,513 haの自然保護区である。アンカラファンツィカの月平均気温は23.2℃か

ら26.6℃と1年を通して安定している。降水量については、11月から4月までの合計が1,371.9 mmにもなる一方で、5月から10月まではわずか5.2 mmと、雨季と乾季が明瞭に分かれる [Sato 2022]。雨季に降る熱帯特有のスコールのような激しい雨は、ものの数秒で全身びしょ濡れになる程である。このような長い乾季と激しい雨を伴う雨季が存在する熱帯林は、熱帯乾燥林と呼ばれる。アンカラファンツィカの熱帯乾燥林は、構成樹種に落葉樹も多く含まれ、乾季になると多くの樹木が落葉する。マダガスカル語で、アンカラ (Ankara) は「山」、ファンツィカ (Fantsika) は「釘」を意味するが、落葉後の樹木の幹が釘のように見えることから、そのまとまりを称してアンカラファンツィカ「釘の山」と呼ぶようになったのである。

食べる動物と食べられる果実

自分で動くことのできない植物は、動物に種子を運んでもらうことで、子孫を離れた場所へと移動させることができる。特に熱帯林では、ほとんどの植物が種子散布を動物に依存しており、動物側もその果実を食べることで、生存に必要な栄養素を獲得している [Howe and Smallwood 1982]。どの動物種

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

がどの植物種の散布者になるのかを知ることが、複雑な熱帯林生態系の構造を理解するうえで重要な要素なのである。マダガスカルでは、固有の霊長類であるキツネザルによる種子散布についてはよく知られていた。しかし、鳥類や齧歯類など他の分類群に関しては、果実食や種子散布の情報が圧倒的に不足していた。また、アンカラファンツィカに存在する樹木の種多様性は、他の地域の熱帯林に比べると低いが、それでも160種にも上る [Fujimoto *et al.* 2024]。そのような中、それぞれの樹種を対象に、潜在的な散布者となる動物種を調べていくことは、ひとりの研究者がおこなう作業としては膨大で、終わりの見えないもののように思えた。しかし、生態学のような自然を相手にする学問では、このような地道なデータ収集は避けて通れず、思わぬ発見が得られることもある。とりあえずやってみようと思った。

目とカメラで観る動物たちの果実利用

まず、結実木を観察し、動物が果実を食べに訪問する様子を記録することにした。2週間に1度、森の中を歩き回り、結実している樹木を探した。結実木の周辺で動物を発見した場合は、しばらく観察して、果実を食べるかどうかを記録する。歩いている時は常に双眼鏡を使って樹冠を見上げていたので、目と首が疲れる調査だった。調査を開始したタイミングの11月初旬が、ちょうど植物が乾期に結実する種から雨季に結実する種へと入れ替わるタイミングだったため、最初の方はいくら森を歩いても結実している樹木を見つ

けることができなかった。しかし、雨季に入り、森の中の湿度が上がってくると、1種、また1種と、徐々に樹木が結実してきた。すると、結実を待っていたかのように、チャイロキツネザル (*Eulemur fulvus*) やコクレルシファカが結実木に集まり、果実を食べる様子を観察することができた (写真1)。どうやらキツネザルたちは、その時々で結実している樹木を訪問し、さまざまな樹種の果実を利用しているようだった。

目視による直接観察は、樹冠を訪問する動物の観察には便利だったが、林床に落ちた果実を食べる動物や、夜間に訪問する動物を観察するには不向きだった。そこで、結実木の樹冠部と林床部に、自動撮影カメラを設置することにした。自動撮影カメラには赤外線センサーが内蔵されており、その検知エリアに入った動物を昼夜問わず録画することができ、しかも、一度設置してしまえば、録画時間や解像度の設定にもよるが、10日から1ヵ月以上にわたり無人で動物の訪問を記録することができる。カメラを設置する時は、できる限り多くの動物種による訪問を記録し



写真1 果実を食べるコクレルシファカ

たかったので、1種につき3本の結実木にカメラを設置していた。しかし、ある樹木が結実していても、同種の他の樹木で結実していないことがよくあった。たとえ結実していたとしても、十分に熟していなかったり、既に動物に食べられた後なのか、数える程しか果実がないこともあった。そのような時は、一日中森を歩き回り、動物が訪問してくれる程度に結実している樹木を探した。

自動撮影カメラの設置には大変な労力を要したが、目視による直接観察だけでは得られない貴重なデータを記録することができた。樹冠部では、夜行性の霊長類であるイタチキツネザル (*Lepilemur edwardsi*) やフトオコビトキツネザル (*Cheirogaleus medius*) が訪問し果実を食べていた。一方の林床部では、地上性のアシナガネズミ (*Macrotratosomys* spp.) が果実や種子を食べたり持ち去ったりする様子が観察された(写真2)。齧歯類は、入手した種子を将来の資源として地面に埋めて保存する性質があり、そのうちのいくつかは回収されずに生き残ることが知られている。彼らによる持ち去りもまた、種子散布に



写真2 果実を持ち去るアシナガネズミ

貢献しているかもしれない。

糞の中の種子を探す

結実木での観察と並行しておこなったのが動物の捕獲である。捕獲することよりは、捕獲した動物の糞に含まれている未消化物を調べることを目的としていた。動物が果実を丸呑みして食べる場合、健全な状態の種子が糞から見つかれば、その植物の種子散布者として働いている可能性が高い。アンカラファンツィカに生息している動物の中で、比較的捕獲が容易な鳥類と小型の哺乳類を対象に、糞を調べることにした。

鳥類の捕獲には、霞網と呼ばれる視認性の低い網を用いた。長さ約15mの網を、高さ5mのポールで支え、通り過ぎた鳥が網に絡まることによって捕獲できる。1時間おきに網を確認し、鳥が網にかかっていた場合は、丁寧に網から外し、糞を出してくれるまで袋に保持する。一度に10羽以上網にかかる時もある。何時間もかからない状況が続くこともある。調査期間中は、鳥が目覚める前に網を張るため、朝が非常に早い。まだ暗い森の中で、ヘッドライトを頼りに眠たい目をこすりながらせせと網を張ったのは、大変だったが良い思い出である。

霞網には、マダガスカルサンコウチョウ (*Terpsiphone mutata*) やテトラカヒヨドリ (*Bernieria madagascariensis*) など、さまざまな種類の鳥がかかったが、ほとんどの糞には植物の種子は含まれていなかった。しかし、クロヒヨドリ (*Hypsipetes madagascariensis*) やマダガスカルシキチョウ (*Copsychus*



写真3 捕獲したクロヒヨドリ

albospecularis) からは、健全な状態の種子を見つけることができた(写真3)。観察調査ではわからなかったが、どうやらこれらの鳥たちは、少ないながらも果実を食べ、糞と共に種子を排泄しているようだ。

小型の哺乳類の捕獲には、シャーマントラップと呼ばれる折畳式のワナを用いた。ワナの中に餌を入れ、小動物が通りそうな場所に置いておくと、餌に釣られて中に入った動物の体重によって入り口が閉まる仕掛けである。最初は、地上性と樹上性両方の哺乳類を捕まえたかったのですが、地面の上と木の幹の間に分けてワナを設置していたのだが、思わぬ障害にぶつかった。地面の上に設置していたワナのほとんどに、アフリカマイマイ(*Achatina fulica*)がかかってしまうのである。どうやら、餌として入れていたバナナやピーナッツバターは、マイマイにとっても大好物のようで、すぐさまワナに飛び込むようだ。仕方がないので、マイマイが大量発生する雨季は地面への設置は諦め、樹上性の哺乳類を対象を絞ることにした。



写真4 捕獲したネズミキツネザル

シャーマントラップには、樹上性のネズミキツネザル(*Microcebus* spp.)やフデオアシナガネズミ(*Eliurus* spp.)が捕まった(写真4)。フデオアシナガネズミの糞は、米粒ほどの大きさで、健全な状態の種子は見つからなかった。齧歯類は種子を嚥下せずに咀嚼するので、採餌の過程でばらばらになってしまうのだろう。一方で、ネズミキツネザルの糞からはさまざまな樹木の種子が見つかった。アンカラファンツィカに生息する果実食の霊長類は、体の大きさにかかわらず、種子散布者として機能していそうだ。

おわりに

アンカラファンツィカでのフィールドワークは、困難の連続で、思いどおりにいかないことばかりであった。しかし、試行錯誤を繰り返し、根気強く続けることでしか得られないものもある。植物の種子散布者を調べるという今回の調査も、決してスマートではない泥臭い作業であったが、おかげでさまざまな動物種による種子散布への貢献がわかってき

た。アンカラファンツィカ熱帯乾燥林を形作るさまざまな動物たち、その全貌を把握するには今後も継続的な調査が必要だが、その一端に触れることができたのではないだろうか。

引用文献

Fujimoto, Y., T. Kaneko, H. Sato, A. H. Rakotomamonjy, Z. L. Razafiarison and K. Kitajima. 2024. Topographical Gradient of

the Structure and Diversity of a Woody Plant Community in a Seasonally Dry Tropical Forest in Northwestern Madagascar, *Ecological Research* 1–12.

Howe, H. and J. Smallwood. 1982. Ecology of Seed Dispersal, *Annual Review of Ecology and Systematics* 13(1): 201–228.

Sato, H. 2022. Significance of Seed Dispersal by the Largest Frugivore for Large-diaspore Trees, *Scientific Reports* 12(1): 19086.

与えられ続けることの負債

——マレーシアのフィールド経験から——

河野 奈津美*

私には負債がある。それは金銭ではなく、与えられ続けることへの心理的な「負債」だ。日々の生活で小さなお菓子をもらったり、私の苦手なコンピューター関連で助けてもらったり、書いた文章に助言をもらったりすると、自分はいかにその相手に返せるかと思案してしまう。2023 年 8～9 月にマレーシアという私の日常とは異なる場所に滞在したときも、この負債は私につきまとい、いつしか私の研究の重要な裏テーマになった。本稿は、その現地滞在経験と私が研究対象とするイスラーム型保険の調査を通じて考えた負債に関する導入的考察である。

タカーフル販売員との出会い

私はタカーフルと呼ばれる、イスラーム型保険について研究している。マレーシアのタカーフル産業は政府主導で推進されていることもあり、その認証数や浸透率において右肩上がりの成長を続けている。そこで、タカーフル産業に関する調査を実施しようと思い 2023 年夏に初めてマレーシアに渡航した。どのように調査を始めればよいのか見当がつかなかったが、渡航前の 7 月という素晴らしいタイミングで、マレーシアのイスラーム企業で参与観察を行なった人類学者の先生がセミナーのために京都大学に訪れた。彼女が

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

パトリシア・スローン＝ホワイト教授 (Arts & Sciences, Department of Anthropology, University of Delaware) である。彼女の著書 *Corporate Islam* [Sloane-White 2018] は、シャリーア（イスラーム法）がマレーシアの企業文化に徐々に取り入れられ、そこで働く人たちの生き方に影響を与えていく様子を描いた。イスラームの教義に沿った経済、「イスラーム経済」を人類学的に調査した代表的な著作である。イスラーム経済の一端を担うタカーフルを研究する私にとって、大いに参照すべき1冊である。パトリシア教授に研究内容を相談に行くと、彼女は自身の知り合いであるタカーフル販売員を紹介してくれた。それが私の初めて出会ったタカーフル販売員、ワンヌール（60代女性）である。パトリシア教授が教えてくれた連絡先を登録し、Whatsappでメッセージを送ると、ワンヌールはすぐに返信をくれた。かくして私は、まずは1人、タカーフル販売員にインタビューができるだろうという希望をもってマレーシアに渡航した。

マレーシアの首都クアラルンプールでは、車窓が結露するほど冷房が強い電車に10分

ちょっと揺られれば、高層ビルが乱立する大都心から小さな食堂や商店が点在する雑多な街並みに移り変わる。クアラルンプールの中心から少し離れたショッピングモールのカフェで、ワンヌールと待ち合わせる。ワンヌールと同席していたリザ（40代女性）も、タカーフル販売員である。ワンヌールはいわゆる損害保険の類似商品である「一般タカーフル」を、リザは生命保険の類似商品である「家族タカーフル」を主に販売していると言う。扱うタカーフル商品の内容が被らないからか、この2人は一緒に行動する機会が多いようだ。調査協力者というだけでなく、人生の先輩ともいえる年上のマレー人女性2名に連れられた私は、昼食のためにワンヌールの運転でショッピングモールからインドネシア料理の店に移動した。10種類もの料理



写真1 クアラルンプールの街並み



写真2 アボカドジュース

を少量ずつとアボカドジュースを頼み、タカーフルからお互いの家族のことまであれこれと話した。アボカドジュースが好きな私は、こんなに美味しいものを食べたり飲んだりしながらしゃべることが研究の一部だなんて、不思議だなあと思っていた。

タカーフル販売員を始めとする、マレー人たちとの交流

まずはタカーフル販売員の2人と知り合えたこと、数時間ではあったけれどもインタビューができたことに満足しながら、私は帰路についた。というよりも、ワンヌールの運転で宿泊先まで送ってもらった。日本から買っていったお菓子を渡したけれども、確実にそれ以上の食事や送迎を与えられてしまった。宿泊先でインタビューした内容を文字に起こしている間にも、その日に撮った写真や今何しているのかというメッセージがWhatsappで送られてくる。さらに、ワンヌールを介して知り合ったリザから、「もしよければ自分のタカーフル営業の上司(boss)を紹介する」と提案される。願ったり叶ったりである。

リザと彼女の上司だというアブ・バカル(60代男性)と会ったのは、初めてリザと会ってから約2週間後のことだった。2人が販売員として働くタカーフル会社が入るビルで待ち合わせ、カフェに移動した。レモンケーキと酸味があるコーヒーを頂きながら、2人の仕事の話を聞いた。彼らはタカーフル会社の社員ではなく、タカーフル会社と代理販売の契約をして働く販売員であるため、仕

事の時間や場所を比較的自由に自分で選ぶことができる。そのため、平日の午後のような時間でも私とカフェでゆっくり過ごすことができる。一方で、販売手数料で営業成績を測られることもあり、かなりタフな仕事であるとアブ・バカルは語った。

それから1週間も経たずに、リザとアブ・バカルが私と会う時間をつくってくれた。しかも今回は、私の滞在先から徒歩3分ほどのショッピングモール内のカフェである。こってりと甘いガトーショコラとコーヒーを頂きながら、また仕事の話や日本の高齢化の話もする。私がこれからマレーシアのペナン島に行く予定を話すと、リザはペナン島にいる友人(kawan)を紹介してくれるという。

リザの紹介で、ペナンで会ったアヤ(70代男性)はリザの養父であるようだった。アヤもまた、私をペナンの美味しい食堂に連れて行ってくれた。マレーシアでの日常的な食事はナシ・チャンプルと呼ばれる、米に自分で選んだおかずをのせたワンプレート形式が多い。アヤがごちそうしてくれたのは、白米に大きなフライドチキンと(私が正しく聞き取れていれば)イカの卵のターメリック炒め



写真3 ペナンで食べたナシ・チャンプル

と、インゲンのような野菜炒めをのせた豪華なものだった。

最後にワンヌールとリザに会ったのは、帰国の2日前である。長い時間を一緒に過ごしたいからと言って、人気がある食堂での朝食から雑貨屋見学、そしてワンヌールの友人たちの集まりにまで同席させてもらった。ワンヌールの友人たちは11人、40～80代の男女であり、ゴルフ場に併設された中華レストランでテーブルを囲んでいた。友人が友人を呼ぶランダムな集まりで、元警察官の同僚が多いらしい。隣に座ったアミナ（60～70代女性）とマレーシアの親族付き合いや、休日の過ごし方について聞いた。昼食会の後はワンヌール、リザ、アミナ夫妻と私の5人で、近くのカラオケに行った。マレー語と英語はもちろん、日本語、韓国語、中国語、広東語、タイ語、ベトナム語など、多言語の曲が選択できることに驚いた。そして、親しみのある日本語の曲でも、歌詞がローマ字表記だと非常に歌いにくいと気がつくのであった。

与えられ続けることのもどかしさ

ここまで、私がやたらとカフェや食堂に連れて行ってもらう話ばかりが続いた。しかしここからが、そしてこれこそが本題である。私は返しきれないほどに、もらい過ぎなのだ。私が交流してきたマレー人たちは、私よりも1.5～2倍近く年上である。現在は学生で稼ぎがほとんどない私に対して、タカーフル販売員である彼／彼女たちはある程度の収入があるだろう。さらに私は、異国の地から

来た旅行者だった。年齢差、収入の差、そしてマレーシア在住者ではないという3つの要素から、私は常に与えられる側だった。一度、二度、「今回は私が払う」と提案したことはあったが、怪訝な顔で財布をしまうよう促すジェスチャーをされた。一度や二度ならありがたく受け取れる厚意であっても、それが三度、四度と続くと自分ばかり申し訳ないという思いが生じてくる。「美味しかった」「楽しかった」「ありがとう」のような言葉を伝えることを意識しているが、はたして奢られる側のよい姿勢とはどのようなものなのか。申し訳なさそうにするのか、平然としているのか、感謝を表するのか。私は、わざわざ時間をとり私と過ごしてくれて、タカーフルから暮らしのことまでさまざまな質問に答えてくれて、さらには美味しい食事をごちそうしてくれる彼／彼女らの行為を当然のものとは思っていない。それはとてもありがたいことだ。しかし、相手が当然と思ってやっているとしたら、それに対して大げさに感謝を表明することは、失礼とまではならなくても何か滑稽なことに映るかもしれない。負債の難しさは与えられる側としてとるべき態度への逡巡と、自分が返す側に回れないもどかしさにある。この心理的な負債は、フィールドワーカーが避けがたいものとして受け入れるしかないのだろうか。

負債を返す手段があるとすれば

与えてくれてばかりの彼／彼女らに直接返せないとしたら、可能性があるのは自分よりも下の世代に対して返すことなのかもしれない。

い。クアラルンプールの街中には、手軽につまめるような揚げ物を売るカウンターがある。店と呼べるほどではなく、路上に台を設置してその場で食材を揚げて売る形態だ。40～50代の女性が3人、交代で営業しており、午後になると小学校から帰ってきたのか10歳前後の少女2人が近くで遊んでいる。少量の揚げ物を購入してカウンター横の椅子に座って食べていると、少女が寄ってきて果物を手渡してくれた。彼女は現代っ子さながらグーグル翻訳を駆使して、「どこから来ましたか」「好きな色は何ですか」のような質問を投げかけてくる。年上のマレー人とばかり交流していた私にとって、自分の半分以下の年齢だろう少女とコミュニケーションをと

るのは新鮮だった。覚えたてのマレー語を一語、二語混ぜながら、グーグル翻訳を介して短い会話をする。それだけで何か相手の役に立つわけではないけれど、自分がこれから取り組む研究が、彼女たちの世代にとって少しでも良いことを還元できるものであったら嬉しい。そうすることでしか、マレーシアで蓄積されたありがたい負債感に行き場はないように思うのだ。

引用文献

Sloane-White, Patricia. 2018. *Corporate Islam: Sharia and the Modern Workplace*. New York: Cambridge University Press.

「自分は誰か」を定位する

——ガーナで感じた人々と関わることの難しさ——

内 凜 太 郎 *

ガーナで出会った日本人々

24時間あれば世界中どここの国でも飛行機で行くことができる今日、遠く離れたアフリカ大陸でも、日本人と出会うことは決して珍しいことではない。私がフィールドとするガーナでは、2023年10月1日現在、在留邦人は298名である。サハラ以南のアフリ

カでは南アフリカの1,065人、ケニアの742人に次いで3番目の規模となっている〔外務省2023〕。

そんなガーナであるが、西アフリカでは稀な英語圏であることや治安の良さを背景に、近年では日系企業からの注目を集め、これが在留邦人数の増加にも関係している。私は当

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

初、この時代の流れにあわせるかたちで、「日本的経営システム」とも評される日系企業の経営スタイルが、ガーナという文化も慣習も異なる国でどのようにローカル化されているのかを知りたいという思いをもっていった。そして2023年9月なかば、現地調査のためガーナにはじめて渡航した。

日系企業を対象とした現地調査を実施するにあたっては、日本人駐在員の方々とのコネクションを得ないかぎり、調査のスタートを切ることすらできない。「まずは名刺だけでも渡さなければ」と焦る気持ちもありながら、毎週土曜日に開催され、日本人の子ども向けに国語と算数を教えている「日本語補習校」に足を運んだ。

日本語補習校は、首都アクラの国際空港ちかくにある建物を借りて開校されており、名前のとおり授業は日本語で進んでいく。教材も、日本の教科書検定を合格した、私の世代にとっては懐かしく感じるものを使用している。ここに通っているのは、日本における幼稚園から中学生にあたる子どもたちであり、



写真1 日本語補習校の様子

学習内容や進度こそ異なるが、年齢に関係なく和気あいあいと学んでいる。

突然補習校に現れた私に不思議そうなまなざしを向ける子もいれば、9月の段階で「クリスマスはサンタさんに何かプレゼントお願いするの?」と私に聞いてくる子まで、集まる子どもたちの性格はまさに十人十色。はじめて訪れたガーナで、その独特な暑さやクラクションの音、人々の明るさに心が躍りながらも多少の疲労を感じていた私は、「ガーナのなかの日本」である日本語補習校で子どもたちやその保護者の方々に温かく受け入れていただき、心が休まったことを記憶している。

知り合った日本人の方々にもお世話になりながらガーナでの調査を継続していたある日、私はガーナで偶然知り合い、同じく単身フィールドワークをしていた大学院生の友人と、とあるレストランで夕食をともにする機会があった。すると、同じレストランに10名ほどの日本人の団体が来店した。そのなかには、日本語補習校で出会った方々もあり、私は簡単に挨拶を交わした。やはり、異国の地で日本人と出会うと特有の嬉しさや安心感を得られるものである。しかし、その日の私は同時に何ともいいがたい違和感を覚えた。この違和感は学部時代、卒業論文を執筆するために実施したインタビュー調査に端を発していることに気づいた。

日本人との関わりが薄いアフリカ人留学生

学部時代、私は卒業論文で、「在日アフリカ人留学生における社会関係資本の形成」をテーマとして研究に取り組んでいた。特に、

在日人数が100人以下のアフリカ諸国から来日した留学生に焦点を当て、彼らの形成する人的ネットワークを中心に調査をしていた。

調査結果のなかでもっとも印象的だったのは、彼らは母国から遠く離れた日本にやってくるにもかかわらず、形成している人的ネットワークの内部に日本人はほとんどおらず、彼らが強い関係性をもっているのはアフリカ出身者ばかりだということであった。この事実は、アフリカ地域研究の視点では肯定的にとらえることができる。日本には彼らと同じ出身国の人々が非常に少なく、日本人とのつながりも不足している。この困難を解決する彼らの生活戦略として、自身のアイデンティティを出身国の国籍からアフリカ大陸へと拡張し、「アフリカ人」として社会関係資本を再編成するのである。これは、松田 [1999] が明らかにした、ケニア・ナイロビのマラゴリ人都市出稼ぎ民における「押しつけられた法や規範を利用して、その目論見とは別な多様なものを創造していく異化の過程」[松田

1999: 195], すなわち「ソフトレジスタンス」に通じるものがあり、日本社会を生き抜くための日常的実践であるといえる。

一方で、「アフリカ地域研究者」としての視点を取り去った「一日本人」としての私は、アフリカ人留学生が日本人との関わりをもたないことにさびしさを感じた。たとえ日本に滞在していたとしても、そこで暮らす日本人と交流しないのはもったいないと考えていたからである。

彼らにとって日本人は、言語も文化も異なる人々であり、日本人にとっても「アフリカ人」はいまなお「珍しい存在」である。さまざまな障壁を乗り越え、絆を深めることは決して簡単なことではない。とはいえ、「せっかく日本に留学できる貴重な機会を得たのなら、もっと日本人の友人も作ればよいのに」といういかにも単純な感想を、当時の私は抱いたものである。

現地で得た気づきと新テーマ

話をガーナに戻そう。

私がレストランで感じた違和感の根底にあったのは、「せっかくガーナで暮らせるのなら、日本人どうしだけでなく、ガーナ人との交流も増やせるのではないか」という、在日アフリカ人留学生に対して抱いたのと似た思いであった。

そして、この思いは自分自身に向けられることとなった。「『日本的経営システム』がガーナでどのようにローカル化されているのかを知りたい」という当初の研究関心それ自体が、日本人側の視点に偏っており、ガーナ



写真2 調査に協力してくれた留学生
彼らにとって、私の存在は数少ない「日本人とのつながり」である。

人との関わりを通してガーナ人の視点を得る機会を無意識に排除しているのではないかと気づかされたのである。「そこで暮らす人々と交流しないのはもったいない」—学部時代、自身がアフリカ人留学生に対して抱いた感情を、そっくりそのまま自分に投げ返されているような感覚であった。

自身の興味・関心を捨てることなく、ガーナ人の視点から研究を進めていくにはどうしたらよいか。考え続けるなかで、「そういえば聞いた覚えがない…」と思うことがあった。それが、「日系企業に勤務するガーナ人ナショナルスタッフにおけるライフスタイル」である。

ガーナでは、2022年3月時点における15歳以上の労働人口のうち、83.6%がインフォーマルセクターとして働いている。公務員などのフォーマルセクターで働く割合は16.1%と非常に少なく、日系企業をふくむ民間部門（Private Formal）にかぎっていえば、その割合はわずか8.2%にすぎない〔Ghana Statistical Service 2023〕。

アフリカ地域研究は、インフォーマルセクターの人々にスポットライトを当てることが多いが、日系企業のようなフォーマルセクターで働く、ガーナでは稀有な「中間層」の人々のライフスタイルとはいかなるものか、明らかにすることを新たなテーマに据えようと決意した。

自分は「誰」であるのか

いざ、新たな研究テーマを設定して現地調査を開始しようと意気込んだが、フィールド

ワークはそう簡単に進められるものではない。新たに浮かびあがった課題は、「ガーナ人」ではないが「日本人駐在員」でもない「日本人」である自身の位置づけである。

日系企業のガーナ人ナショナルスタッフにとって、日常生活のなかで関わりをもつ日本人は、基本的には駐在員の上司のみである。つまり、彼らの認識の内部では「日本人＝上司」という等式が成立しており、私という存在もその枠組みに当てはめられる。一方の私は、自分が上司などという認識はもちろんなく、日本から調査のためガーナにやってきた大学院生として、ナショナルスタッフの人々の立場で彼らのライフスタイルを観察したいと考えている。

ここに齟齬が生じる。私がナショナルスタッフの人々との距離を縮めたいと考えていても、私は日本人駐在員の上司とおなじ枠組みにある人間、あるいは上司と通じる人間とされてしまうため、会話の「かしこまった感」がどうしても拭えないのである。しかし、こうなるのも無理はない。自身が社会人であることを想像したとき、上司に対して日常生活の様子を見せたり、自分のライフスタイルについてべらべらと語ったりすることなど、まずできないだろう。ナショナルスタッフではなく、駐在員でもない自分をどのような存在として位置づければよいのか、どうすればナショナルスタッフとの見えない壁を打ち破ることができるのか、明確な答えが出せないまま、2023年11月末、帰国の日を迎えることとなった。

はじめて挑んだガーナでのフィールドワー

クは、そんな難しさを感じた2ヵ月半であった。駐在員とナショナルスタッフのあいだに入る、自律した「第三の存在」としての位置づけを確立し、少しずつ見えない壁を取り払うことが次のフィールドワークで自身に課す課題である。もしかすると、この課題を克服するプロセスは、ガーナにおいて他者から受ける「大学院生」と「日本人」という2つのラベリングを戦略的に利用し、「第三の自分」を創造するという私なりの「ソフトレ

ジスタンス」なのかもしれない。

引用文献

- 外務省. 2023. 〈<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100436737.pdf>〉(2024年5月20日)
- Ghana Statistical Service. 2023. 〈https://statsghana.gov.gh/gssmain/fileUpload/pressrelease/AHIES%20QUARTER%203%202022%20LABOUR_STATISTICS_REPORT.pdf〉(2024年5月20日)
- 松田素二. 1999. 『抵抗する都市—ナイロビ 移民の世界から』岩波書店.

ファインダー越しに繋がる世界

——カメラによる出会いの記録からみえるラオス——

好 光 百 合 *

「Sabaidii, thaihub dai bo? (こんにちは、撮影してもいいですか?)」

道すがら、出会うラオスの人たちにこのように声をかけると、みんな少し照れながら「いいよ、いいよ」と応対してくれる。そして、この言葉をきっかけに会話が始まる。

私にとってカメラは気分転換となる趣味のひとつであり、人との会話のきっかけを生み出すツールであり、そしてフィールドワーク中の副産物的な出会いの記録として機能している。そのような出会いの中で、たまたま調査に繋がる機会もある。間接的に研究活動の

助けにもなっていて、フィールドワークには欠かせない存在かもしれない。今回の滞在でも、5台のカメラをフィールドへ持ってきた。一眼レフ、フィルムカメラ、デジタルカメラなど気分や場面によってカメラを使い分けるこだわりがある。また、撮影した写真は街中のコピー屋さんで印刷し、被写体となった人々に渡すのも楽しみのひとつである。データとして渡すよりも、紙で渡すことで彼らの思い出となってくれたらという思いからだ。

ここでは、そんなカメラを通じた人との出

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

会いの記録の一部から垣間見えたラオスを語りたい。

ここは、ラオス最北部に位置するボンサリー県にあるムアンクア郡。調査のため北部の県を移動し、調査拠点である首都へ戻の際に経由した場所だ。ベトナムとの国境に近く、毎朝ベトナム北部のディエンビエンフー行きのバスが運行している。この地を経由したのは、県境を舟で越えるためだ。メコン川支流のナムウー川に沿った小さな集落であるムアンクアには、バスだけでなく、1日2便の舟が隣県のルアンパバーン県へ向けて出発する。ある日の午前にバスで村に到着し、舟着き場に向かい、舟乗りの男性たちに声をかけた。

「舟に乗りたいたけど、何時に出発するの？」

「おお、ちょうど15分前に舟が出て行ったよ。ちょっと待って、こっちに戻るよう電話する」

こう快活に答える男性は、先ほど出た舟の運転手らしき相手に電話をかける。長時間のバス移動で疲れていたため、彼がとても頼もしくみえた。残念ながら舟が戻ってくることはなく、明日の便で移動するように勧められた。聞けば、コロナ禍によって1日1便に便数が減ったとのことだ。

翌日までやることがないので、村中を歩き回り、カメラを首から下げながら散策の時間とした。川に沿って形成された集落の村だからだろうか、川ではさまざまな人たちに出会った。下り坂を利用して、自転車で川に突っ込むという少々危なっかしい遊びを楽し



写真1 舟着き場で運転手に電話をかけてくれた男性

んでいる少年の集団、停留している舟の周りで井戸端会議をしている舟乗り、川の水でバイクを洗車する男性。

彼らにとっては何ら変わりのない日常生活風景なのだろう。しかし、なんだか彼らの姿が私の目には生き生きとして映り、思わず声をかける。

「今日も仕事なの？」

「いつもここでバイク洗ってるの？」

ぐいぐい質問する私を鬱陶しく思わずに「明日の舟を運転するんだ、明日はそのまま経由地の村に宿泊するよ」「みんなよくここで洗うよ」とそれぞれ朗らかに答えてくれ、舟の仕事内容や乗り継ぎ場所、時間など、今まで知らなかった情報を談笑を交えて提供してくれる。調べても出てこない、その土地の生の情報を確保するためにも重要な時間だ。そんな彼らとの会話の中で、思わず笑顔に

なったり、真剣な表情になったりする瞬間がある。ひとたびその瞬間を見ると、自然とシャッターを切ってしまう。撮った写真を見せると「うん、いいね!」と満足げな顔をこちらへ向けてくれ、お互いその場から離れる。

「じゃあね、また明日!」

翌日、昨日逃した便に乗り込み、約5時間の舟移動を開始した。舟からの風景はラオスの生活を少しだけうかがい知れる。水浴びをする僧侶、川沿いに佇む小さな集落で農作業をする人、その周りを走り回る子ども、そして舟の横を通り過ぎるスイギュウの群れ。ラオスならどこでも見るような光景だが、舟からだ、また新鮮に感じる。

この道中では、隣村に住んでいるというラオス人女性が横に座った。ムアンクアに用事があり、そこから帰る道中だと言う。彼女と会話が弾む。「あなた、私の娘に似ているわ」と笑顔でスマートフォンから写真を見せてくれる。カメラのフラッシュが光り、液晶モニターに彼女の顔が映る。「子どもは何人いるの? 家族は?」と聞き返しながら、初対面の人への質問として、家族の話題を出すようになって自分自身に対し、ラオス人になったもんだと心の中でほそっと呟いた。

舟に揺られ、少し眠たくなってきたところで中継地点の集落に止まった。集落から数人の村人が集まり、舟に積んでいた大きな段ボール荷物を引き取る。その中には小学生ぐらいの子どもの姿もある。自身の背丈とあまり変わらない荷物を一生懸命に抱えている。子どもたちは「労働」や「仕事」をしている



写真2 舟から荷物を降ろす運転手

というよりも、「家のお手伝い」をしている感覚に近いのだろうか。食堂や道端に行けば子どもが接客し、宝くじや果物を売っている様子をよく見かける。そんな彼らの仕事ぶりを目の当たりにするたびに純粋に感心し、自分自身がこの年齢の時に同じことができたのだろうか、彼らと自分を重ね合わせ、田んぼの周りで友人とともに虫を採り、遊び走り回っていた時代に想いを馳せた。

この時は、岸に舟を着け、荷物を運び、舟を支える運転手の仕事ぶりにも強く惹かれた。ラオスは2022年に中国資本によって鉄道が初めて開通したが、未だ主な交通手段はバスで、舟で移動する場面も少なくはない。大量の荷物を載せた、不安定な小舟で移動する彼らの仕事ぶりは時に荒々しいように感じ

るが、力強く、動きに無駄がない職人技だ。そんな舟乗りの後ろ姿を見て、カメラを思わず握る。撮ってもいいか身振り手振りでジェスチャーを送り、シャッター音が静かに鳴る。とうとう目的地になり、私のバックパックを親切に降ろしてくれた彼にこう伝えた。

「本当にありがとう！」

辿り着いた場所は、ルアンパバーン県ムアンゴイ郡。ここは小さな集落で、バンガローなどでゆっくり滞在できると、一部の海外旅行者たちの間では人気の穴場スポットともなっている。

しかし、完全に観光地化された場所でもなく、欧米人向けのレストランやバンガロー、地域住民の居住空間が入り混じっている。狭い空間に、観光客の外国人と、軒先で機織りをしたり漁の準備をしたりしているラオス人が混在する。ラオスの中でも珍しい光景が広がっているのが、ムアンゴイだ。

この村で、昼間にカメラを抱えて道を歩くと、背中に人の気配を感じた。外国人の存在に慣れた様子の子どもたちが、興味津々で近寄ってきたのだ。誰もがスマートフォンによって簡単に撮影ができ、写真や映像を楽しむ時代である故なのだろうか、一眼レフが彼らにとって物珍しいようだ。「今日はもう学校終わったの？」と尋ねると、「終わったよ！学校に行ってみる？」と子どもたちに言われるがまま小学校の校庭に向かう。

「中国人なの？ 韓国人なの？」「ううん、日本人だよ」

「君は今何歳なの？」「あなたは？」

そんな他愛のない会話を続けながら校庭に

到着した。そのまま私を放置して、だるまさん転んで遊び始める。すると、子どもたちが韓国語で「だるまさんが転んだ」と言っているのが聞こえた。2021年にNetflixで配信され、大人気となった韓国ドラマ「イカゲーム」での名場面を真似しているようだ。よく見れば、ドラマキャラクターが着用している服と同じデザインのワンピースを子どもが着ている。タイやベトナムで流通したものが、ラオスのマーケットに少し遅れて流れ着いているのだろうか。ラオスでは、2023年現在でもコロナ禍中に日本や韓国で流行ったアニメ・ドラマのキャラクターを模倣した商品をナイトマーケットでよく見かける。特に、ここ近年は、韓国がラオスに対して影響を与えていることを日々感じる。韓国のポップソングを聞く人や韓国焼酎を飲む人が増え、多くの韓国人団体観光客がゴルフを楽しむためにラオスを訪問し、首都の街中でも韓国の大きな観光バスを見かけるようになった。5年前にラオスに滞在した際は、「日本人か？」と尋ねられることが多かったが、最近はおそらく「韓国人か？」と質問される。現に、子どもたちにもそのように尋ねられた。ラオスにとって、中国に次いで韓国が東アジアの中でも近い存在となっているのだろう。そんなラオスと東アジアの関係に思考を巡らせながら、子どもたちの姿をファインダー越しにおさめる。そして、遊びに飽きた大人数の子どもたちに、強めに腕を引っ張られながら小学校内を案内され、椅子に座られる。私が「このラオス語、どうやって書くの？」と聞くと、こぞって黒板に文字を書き



写真3 小学校を案内する子どもたち

出す。ひょんなことから始まった授業を形に残そうと思い、カメラを弄っていると、子どもたちが思い思いのポーズを取り始める。可愛らしい仕草をする子、真顔でレンズを見つめる子、はにかんだ笑顔で棒立ちする子。ポーズだけでもそれぞれの個性が出る。

そろそろ夕飯を食べるからと小さな先生たちに別れを告げた。彼らも夕飯の時間だ。親たちが帰りを待っているだろう。少し寂しい気もするが、最後まで笑顔で。

「バイバイ！元気だね！」

さあ、今日もカメラを相棒に、新しい出会いに期待しながら道を歩きつづけていこう。

「Sabaidii, thaihub dai bo ? (こんにちは、撮影してもいいですか?)」

ネパール「人民戦争」の終結に関する語り

—K.B. ロカヤ氏の証言より—

荒 木 彩 陽 *

2023 年夏、私はネパールの首都・カトマンズを中心に、ヒンドゥー・ナショナリストやその他宗教団体に所属している活動家たちに対するインタビュー調査を行っていた。調査を進めていく中で、クリスチャンの活動

家として紹介してもらい出会ったのが、K.B. ロカヤ氏である。

K.B. ロカヤ氏とは？

医療設備もない田舎の、ヒンドゥー教徒の

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

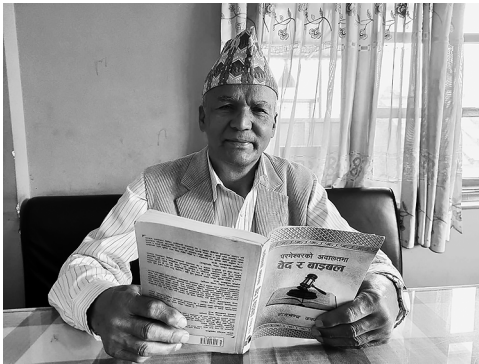


写真1 K.B. ロカヤ氏

家庭に生まれ育ち、1972年にコルカタの大学に進学した際、キリスト教に改宗した。ネパールに帰国後は、教会の設立や大学の講師などに従事。その後、「人民戦争」を終結させることを目的に、2003年10月から2007年までネパール共産党毛沢東主義派（マオイスト）のメンバーとなった。

ロカヤ氏行きつけのカフェで、2日間計8時間におよんだインタビューでは、他にも興味深い話を聞くことができた。しかし、以下では「人民戦争」終結のための和平交渉のテーブルに着くまでのロカヤ氏の貢献について焦点を絞り、記述する。

「人民戦争」前後の略歴と停戦協定までの流れ

ネパールは1990年に第一次民主化を迎えるまで、約200年にわたって国王を頂点とする封建体制がとられてきた。しかし、民衆に政権が渡されても政党政治は不安定であり、マオイストが台頭した後、1996年から「人民戦争」へと突入していく。

2000年代初頭には、ネパールにとって大

きな2つの転換点があった。ひとつは2001年6月1日に発生したナラヤンヒティ王宮虐殺事件である。これにより、第10代ネパール国王であったビレンドラ国王夫妻を含む10人の王族が亡くなり、国王の弟であるギャネンドラが新しい国王となった。そして、そのギャネンドラ国王が2002年10月4日に無血クーデターを行ない、既存の政府を罷免した後に国王が任命した首相率いる新政府が発足した。これにより、それまで警察隊のみがマオイストに対抗していたが、そこにネパール王国軍が加わるようになり、争いは激しさを増した。

また、2001年にアメリカ合衆国で発生した同時多発テロも「人民戦争」に大きな影響を与えた。これを受け、ブッシュ大統領（当時）は同年9月23日に大統領令13224を発布し、テロリストの活動を食い止めるための国際的な活動を先導することを発表すると同時に、世界中のテロリスト集団のリスト化を開始した[U.S. Department of State 2024]。また、マオイストも2003年5月に人民義勇軍を各地で結成することを中央委員会議で決定し、非武装メンバーや一般市民などに対する武装訓練を始めた。このような潮流により、2003年10月31日にはマオイストはアメリカ合衆国からテロリスト集団であると認定された。以降、アメリカやイギリスなどの欧米諸国や隣国インドなどは政府側への支援を表明し、政府側が強硬姿勢に転じることとなった。これらの要因が重なったことから、「人民戦争」は激化の一途をたどった。

2006年4月には王政を打倒するという共

通の目的から、マオイストも7つの議会政党と協力すると宣言し、19日間におよぼゼネストが行なわれた。結果、同月24日には国王が主権を国民に返還し、国会を復活させることを宣言した。これは第二次民主化運動とも“四月革命”とも呼ばれている。同年5月2日に7政党による連立政権が発足し、26日にはマオイストと7政党による連立政権との間で和平に向けた交渉が開始された[小倉 2015]。そして同年11月21日、マオイストと連立政権が包括的和平協定に調印した。

和平交渉に至る過程は複雑で、そこには数えきれないほど多くの要因が関わっているであろう。しかしその中でも、本稿で紹介するK.B. ロカヤ氏による語りは、和平交渉を開始させるひとつの重要な要因を指し示すものだと考える。

和平交渉を開始させるための、ロカヤ氏の貢献

「人民戦争」が激化の一途をたどっていた2003年、ロカヤ氏は国際的に大きな力をもつアメリカ合衆国とヨーロッパ連合（EU）、そして英国の3つの国家および国際機関とマオイストが対話を行なうことが平和的な終戦につながると考えていた。しかし、これらの国家や国際機関はアメリカが主導していた「テロとの戦い」を支持しており、「アメリカ合衆国は（テロとの戦いを主張していたことから）ネパール政府に対してマオイストと対話することを許可しなかった」というほど強い規制があったことから、平和的な終戦の

ための対話はほぼ不可能のように思われていた。

ここで諦めることなく、欧米諸国のキリスト教徒仲間の人脈を使い、さまざまな行動を起こしたのがロカヤ氏であった。その第一歩として、6回にわたるノルウェー訪問と、ドイツ並びにベルギー、イギリス訪問にてネパールの現状について声を挙げた。ノルウェーに焦点を当てて訪問した理由としては、当該国が平和構築や和解について非常に積極的に活動しており、これについての知識を豊富にもっていたこと、そしてネパールにとって最も大きなドナー国のひとつであったことを挙げている。自らの主張を多くの人々に伝えるために、ノルウェー議会や政府機関、オスロ大学、ノーベル平和賞の事務局、そして報道機関などを訪問した。またドイツに関しては、当時マオイストのメンバーであった Chandra Prakash Gajurel 氏が同国に招聘されたことからこれに同伴し、8都市にて「人民戦争」に関するドキュメンタリー映画の上映会を実施した。これ以外にも、ドイツ議会や政府機関、教会や報道機関などに足を運んだ。ベルギーでは欧州連合の本部を訪れ、イギリスではBBCの「人民戦争」についての番組に出演した。

いずれの国でもロカヤ氏の主張は一貫しており、①マオイストはテロリストではなく、ネパール政府はマオイストと対話を行なうべきであるということ。そして②それぞれの国の援助により、ネパール政府に対話の機会をもつように圧力をかける、あるいはネパール政府への経済的援助を止めてほしいという2

点であった。上記のとおり、これらの主張は国家にだけ向けに行なわれたわけではなく、民衆に対しても行なわれた。ノルウェーにおいては、「ノルウェー国民の税金がネパール人を殺すために使われている」と人々に訴えたことにより、人々の心を揺さぶった。その結果、在ネパール・ノルウェー大使がメディアに対して「もしネパール政府がマオイストとの対話を開始しないのであれば、ノルウェー政府からの援助については検討する必要がある」という意見を表明する事態にまで発展した。また、イギリスは情報機関の調査員をネパールに送り込み、マオイストの副代表である Krishna Bahadur Mahara 氏との対談を実現させた。これらの活動により、国際連合とイギリスは（ネパールにおける「人民戦争」については）必ずしもアメリカの掲げる「テロとの戦い」に従うのではなく、マオイストとネパール政府の対話の必要性について理解を示し、これについて反対することはなかった。

次に、ロカヤ氏は「人民戦争」が終結するためには、ネパール政府の後ろ盾となっているアメリカ合衆国政府に“テロリスト”であるマオイストとの対話を認めるように政策転換させることが必要であると考えていた。しかし、アメリカ合衆国の政策を変えさせることが非常に困難であることは、ロカヤ氏も理解していた。そこで、クリスチャン・コミュニティを利用してアメリカ合衆国の民衆に訴えかけ、市民の力によってこれを成し遂げようとした。実際にアメリカ合衆国を訪れ、「国家間や国際機関が仲介する形ではな

く、個人のつながりと協力によって成し遂げる新たな形の紛争解決を求めている」というキャッチフレーズを用いて人々に訴えかけた。人々は信仰の自由を獲得するというマオイストの要求に共感し、戦争を止めるために市民の力が必要だという点に理解を示した。しかし、国家政策を変えるほどの影響力を与えることはできなかった。

途方に暮れていたところ、ここでクリスチャン・コミュニティの奇跡が起こる。ロカヤ氏が協力を求めたアメリカのクリスチャン・コミュニティの中に、ネパールで30年程宣教活動をしていた宣教師がいたのだ。彼が実際にネパールを訪れ、他のアメリカ人宣教師と話をしたことにより、在ネパールアメリカ大使館の高官の関係者である宣教師と知り合うことができた。そして、ロカヤ氏はネパールに在住するアメリカ人宣教師の家で、非公式に大使館の高官と面会することに成功した。何度か話し合いを重ねていくうちに、アメリカ大使館が正式にマオイストとネパール政府が話し合いを行なうことを認めたのである。ロカヤ氏による一連の働きかけが、和平交渉の開始を後押ししたという。

「残念ながら、これらの活動に関する正確な日付は覚えていないが、いずれも2002年から2006年の和平交渉開始までの間に行なわれたことである」とロカヤ氏は述べる。「いっそのこと、日記でもつけていれば良かったんだけど」と後悔の念を示していた。

前述のとおり、これだけが「人民戦争」を終結に導いたと考えることは難しいだろう。しかし、市民レベルでもこのような動きがと

られていたという点について、完全に無視することもできない。「この話の一部はネパールメディア向けに話したことがあるが、ここまで詳細に時系列順に誰かに話したことはなかった」とロカヤ氏は言う。すべてが真実であるという裏付けはとれないが、非常に貴重な証言であることに間違いはない。

引用文献

- 小倉清子. 2015. 「武装闘争から議会政治へ」南真木人・石井溥編著『現代ネパールの政治と社会—民主化とマオイストの影響の拡大』明石書店, 55-90.
- U.S. Department of State. 2024. "Executive Order 13224." (<https://www.state.gov/executive-order-13224/>) (最終閲覧日 2024 年 5 月 30 日)

にぎやかなお通夜

——残された者への寄り添い方——

佐々木 恩 愛*

ラオスで生活をしていると、葬儀に参加することがよくある。ホームステイ先のお父さんは、仕事柄顔の広い人だったこともあり、しばしば葬式に招かれていた。ラオスでは、人が亡くなると、遺体を自宅に3日間安置し、その後寺院や村の郊外で火葬し、その後、親族が遺骨を骨壺に収めて、墓地や寺院境内に納める [増原 2003: 259]。また、上座部仏教のしきたりに則り、故人の男性家族はその期間だけ出家し、女性家族や小さな子どもは白い服を着る。これらは、上座部仏教を信仰する低地ラオ¹⁾の人々の慣行である。私が参加したのは、遺体を自宅に3日間安

置している家への訪問（通夜）と火葬への参列であるが、それらを通して個人的な出来事ともつながる印象的な経験をした。

お通夜の雰囲気

ある日、お父さんの職場で働く方の家族が亡くなり、私はその方のお通夜に行った。服装はシン（ラオスの伝統的な巻きスカート）であればなんでも良いと言うので、紺色のシンに真っ白なワイシャツを着て行った。故人の家に着き、ご遺族に挨拶すると、棺が置いてある部屋に案内された。棺は綺麗に飾られ、花やお金が供えられていた。ご遺族とお

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) ラオスには数多くの民族が暮らしているが、1950年以降、全ての民族を居住地の高低によって、低地ラオ、山腹ラオ、高地ラオの3グループに分けられた。現在この分類は公式には使用されていないが、一般的に広く使われる [安井 2010: 19-22]。低地ラオの人々は人口の半分以上を占めるタイ系民族である。

話し、持参した香典や食べ物をお渡ししてから、棺の前で写真を撮った。ラオスでは誰かが亡くなり、Facebook 上でそのことが知られる時も亡くなった直後の顔の写真がそのままアップされる。その知らせを見たり、電話で連絡を受けたり、あるいは通りがかったりした人が次々と会場にやってくる。

火葬するまでの間、故人の家には、昼夜問わず人々が訪れる。この日も、夜遅くに行ったにもかかわらず、家の外にいくつも用意された丸テーブルを囲み、多くの人が料理を食べながら、みんなでおしゃべりをしていた。あるテーブルでは、たまたま同席した同郷出身の人たちが地元トークに花を咲かせていたり、別のテーブルではカード賭博に興じる人々が、風で飛ばされそうになる紙幣を必死に抑えたりしていた。会場には、故人と全く関わりのない、ただカード賭博がやりたくて来ている人もいた。ホームステイ先のお父さんはというと、故人の弟が始めたラオス南部のコーヒー栽培の話で盛り上がり、どのくらいの面積の土地で栽培しているのか、どのように育てるのか、収穫までどれほど費用や時間がかかるのか、根掘り葉掘り聞いていた。ちょうど、お父さんが現在もっている土地で、何を栽培すると一番儲かるのか考えていたところだったのだという。会場の端に置かれたテレビには昔のタイのコメディ映画が上映されていた。お通夜で振る舞われる料理はホテルのバイキングさながら、ビュッフェ形式でいろいろな種類の料理をいくらかでも食べることができた。どのテーブルからも笑い声が聞こえ、訪問者だけでなく、遺族も挨拶を

したり、料理を準備したりしながら笑顔を見せていた。

寺での火葬

また別の日、違う葬式に行った。故人は元大学教員であった。この日も前回と同じように、亡くなった方の家では、学生や教員などの大学関係者をはじめ、生前親交のあった（あるいは通りがかりの）多くの人が訪問し、同じようにたくさん料理を食べ、カード賭博をし、おしゃべりをしていた。家族は家の中の棺の前で、次々とやってくる訪問者と挨拶をし、忙しそうにしていた。

しばらくすると、お通夜の会場にトラックがやってきて、親族の男性が中心になって綺麗に装飾された棺を載せた。出家し、オレンジの布に身を包んだ親族の男性たちが棺と一



写真1 寺の火葬場

緒にトラックの荷台に乗り込み、両端から支えながら寺まで運んだ。ゆっくりゆっくりと進んだ葬送の行進は、少し離れた村の寺で止まった。参列者もバスや車であとを追う。みんなが寺に到着すると、火葬を前に、故人の来歴が読み上げられたあと、経があげられた。その後、参列者は線香と白い紙でできた花を手に取り、順番に棺の前に行ってそれらをお供えし、手を合わせた。お供えを終えた人々を、白服で身を包んだ女性たちが手を合わせながら迎え、参列者はその先にある甕に入った水で手を洗った。

その後、家族や親しい人たちだけで棺の前で写真を撮り、それが終わると、すぐに棺にガソリンが注がれ、火がつき、あっという間に、熱風を立ち上げながら、炎が高く燃え盛った。その時初めて、白い服を着た親族の女性たちが泣いているところを見た。少し経つと、まだ火が大きいうちに、親族も参列者

も帰っていき、あっという間に誰もいなくなった。火葬には時間がかかるそうで、お骨拾いや儀礼は後日行なうのだという。私は、どんどん小さくなっていく火をしばらく見ていた。

積徳行と人々の振る舞い

この2つの経験を通して、私は日本とは全く違うお通夜の様子に違和感をもった。懐かしい人との久々の再会に楽しくおしゃべりをするだけならまだしも、賭け事や儲け話に一生懸命になり、映画、よりもよってコメディ映画を上映することに私は戸惑った。私は故人とは一切面識がなかったものの、誰かの大切な人が亡くなったという事実に対し、遺族の悲しみに寄り添い、粛々とした気持ちで参列しようと思っていたが、ラオスの人々は生前の故人にまつわるエピソードを話すわけでもなく、ただ好き勝手に過ごして、おしゃべりをしている様子であり、私も含めた参加者の一部は、どのような方のお葬式に参列しているのかわからないままだった。

ところで上座部仏教を信仰する人々にとっては、善い行いによって徳を積むことが何より大事なことである。積徳行は、この世に生きる者が、僧侶を介して実施する喜捨を前提とした行為である。積徳行の文脈でみれば、生前故人と深い関わりがない人も、香典や供養、共食のための品々を持ち寄って、遺族が主催する儀礼に貢献し、僧侶を頂点とする儀礼環境の中で、自らの徳を積むことができる[林 2000: 224-226]。また、功德を介して死者を仏教的来世へと定位づける一連の葬送儀



写真2 棺に供える紙でできた白い花

礼は、死者の霊を悪霊化させないために、遺族以外の村人も参加して行なわれる集合的な行為である。そのような動機で集まった、必ずしも故人についてよく知るわけではない者同士の会話やコミュニケーションは、故人の思い出話より、世間話やカード遊びの方がスムーズに行なえる。

また、東北タイのラオ人社会²⁾では、死期が近い人の家に人々が集まり、当人をあたかも無視するように冗談を言い合う。そのような行為は、不謹慎であるどころか、遺族になろうとする人々への「思いやり」であるのだという [林 2000: 208]。ラオスのお通夜に参列していた40代の男性は、にぎやかなお通夜について、以下のように語る。

「カード賭博は、火葬する前に、数日間家の中にある遺体をみんなで寝ずに守るために、夜通し起きていられるようにやるのだよ。コメディ映画も、悲しく落ち込むのではなくて、笑って楽しく夜を明かすために流しているのさ。」

残された者に寄り添う

私が大学院に入学する少し前、突然祖母が亡くなった。友だちと卒業旅行に行っている時、母親から電話がかかり、何が起きたのかわからないまま、祖母が住んでいた秋田に向かった。祖母の葬式では、喪服を着た人たちが次々に参列し、母や叔父に小さな声でお悔

やみの言葉や励ましの言葉をかけていった。一方、私は、葬式会場の裏で、急遽取り揃えた喪服のあまりのピチピチさや、タイツだと思って買ったものがとても長いソックスだったことに周りを気にせず笑っていた。笑い声を聞いた参列者はなんと不謹慎な孫だと思ったことだろう。今にして思えば当時の私は受け入れ難い突然の出来事から自分の心を守ろうとしていたような気がする。しばらくして、火葬炉に遺体が入られ、燃烧していくのを待つ間、初めて現実と向き合い、やっと涙が出てきた。

当時、とても悲しいはずなのに、静寂な祖母の葬式でなぜ笑うことができてしまうのか、自分自身でも理解ができなかった。ラオスのお通夜に参加してみると、遺族への寄り添い方は、悲しみの共有だけではなく、冗談を言って笑い合ったり、にぎやかに過ごしたりすることも含まれるのだと納得した。個人的な思いであるが、祖母が亡くなった時、ラオスのお通夜のようなにぎやかさに囲まれていたら、ひとりだけでは到底受け入れることのできない出来事を前に、少し心が救われたかもしれない。しかし、いざ遺体が燃えていくさまを見ると、否応なくその現実と向き合わなければいけなくなる。ラオスのお通夜での笑い声や、火葬場での涙は、個人的な経験ともつながり、今も印象深く記憶に残っている。

2) タイ側に移住したラオの人々は、現在のラオスの前身ラーンサーン王国の建設と分裂による紛争から逃れてきた人や、18世紀以降タイのラタナコーシン王朝成立後に戦争捕虜として強制移住させられた人々である [林 1998: 686-687]。

引 用 文 献

- 林 行夫. 1998. 「『ラオ』の所在」『東南アジア研究』35(4): 684-715.
- . 2000. 『ラオ人社会の宗教と文化変容—東北タイの地域・宗教社会誌』京都大学学術出版会.
- 増原善之. 2003. 「第9章 文化」ラオス文化研究所編『ラオス概説』めこん.
- 安井清子. 2010. 「第2章 居住地の高度による民族分類—民族分布, 分類の方法, 分布状況」菊池陽子・鈴木玲子・阿部健一編『ラオスを知るための60章』明石書店.